

# 保育学生におけるウクレレを使った子どもの歌の弾き歌い ―即座にマスターできる方法の研究―

野 口 雅 史

## Playing Ukulele with Singing Children's Songs by Nursery School Students: Study How to Master in a Short Time

Masafumi Noguchi

### 1. はじめに

近年は保育者養成校にピアノが全く弾けない状態で入学する学生が増えている。今後、養成校の受験者数が減少すれば、そのことに拍車をかけることも予測される。ピアノ技術の習得については、マスターするまでに時間と労力がかかり、負担だと感じたり、苦手意識を持ってしまう者がいる。音楽教育の観点から、保育者をめざす者にまず第一に大切なことは、自ら楽しく音楽活動に取り組めるマインドを築くことであろう。そこで、ピアノをはじめとする器楽の学修に負担や困難さを感じている学生にも「困難度の少ない楽器」で簡単に歌の伴奏ができる楽器（第二楽器）はないものかと考えた。通常、保育や音楽教育における第二楽器といえば、ギターもしくはアコーディオンが考えられる。しかしながら、演奏の困難度、習得に要する時間、導入に際する費用、教員が指導できるか等を考慮すると、それらを授業で取り組むことは難しいのが現状である。

上記を勘案し、ここではウクレレに注目して、短時間で簡単に弾き歌いが習得できる方法を考え、その困難度を検証する。またウクレレを用いることにより、保育の歌唱活動に対する学生のモチベーションを上げることが可能であるかを考察したい。

なお、この論文は筆者が全国保育士養成協議会第52回研究大会ポスター発表（「ウクレレによるコード伴奏法について―気楽に弾き歌いを楽しむ楽器としての可能性―」）において発表した内容を基に、最新のデータと照らし合わせて執筆したものである。

### 2. ウクレレの特徴

#### (1) 歴 史

ウクレレはハワイで誕生した楽器である。その原型は1878年にポルトガルからの移民によって持ち込まれた。ハワイにはコアという硬い材質の木があり、コア材のウクレレはよく響く。そういった適した材料や風土と相まって現在のウクレレが誕生した。音色は明るく、愛らしいボディは庶民の生活に自然

に入りこんだ。現在もハワイの精神性とも結びつき、その優しい音色は癒しの楽器として扱われ、日本でも人気を呼んでいる。また近年では、ジェイク・シマブクロのように超絶技巧やエレクトリックエフェクターなどを駆使して、高度で表現性の高い演奏をするアーティストもいる。

## (2) 形 状

ネック、ボディ、サウンドホールなどギターとほぼ同じ形をしているが、弦は4本である。首から掛けるストラップを使用しなくても弾くことができる。また、ピックを使わずに指ではじいて演奏できる。

## (3) 費 用

入門用として、音程が安定し、一般的な演奏に耐えうるウクレレ（ソプラノ）は、市価で1台7千円～2万円程度で売られている。そのほか必要なものとして調弦用のチューナーがあるが、1個2千円程度で購入できる。

## 3. 保育現場での実践報告

飯塚朝子は2012年の日本保育学会第65回大会発表「子どもの歌唱における伴奏楽器について～ウクレレ伴奏の可能性～」で2年9ヶ月にわたる実践を報告している。その要旨は次の通りである。

- ①少人数で歌を楽しむ場合から、100名以上の子どもたちの歌唱まで対応でき、伴奏楽器としてピアノ同様に活用できる。
- ②保育室内の他のあそびの空間を侵さずに歌を楽しめる。
- ③ウクレレの音色から子どもの声が優しくなる。
- ④子どもに向き合って、子どもの様子を見ながら伴奏できる。

## 4. 保育におけるウクレレの利点

3. の飯塚による報告を含め、ウクレレを保育の現場で用いる際、期待できる点が数多くあると推測される。保育において利点と推測される点は、少なくとも次の7つがある。

- (1) ボディが小さく軽いので、気軽に持ち出して利用できる。また園外や野外での活動に用いやすい。
- (2) 歩いたり、身体を動かしながら演奏できる。
- (3) 子どもと面と向かって共に歌い、子どもの表情や様子を見ながら伴奏できる。
- (4) 音量がさほど大きくないので部屋全体の音環境を制圧することがなく、他の活動（コーナー）が侵害されない。
- (5) 一般的に他の伴奏楽器より安価であり、また電子音ではなく生の音の良さを子どもたちに聴かせることができる。
- (6) ギターに比べて弦が少ないので、指でコードを押さえる箇所が少なくなるため入門しやすい。

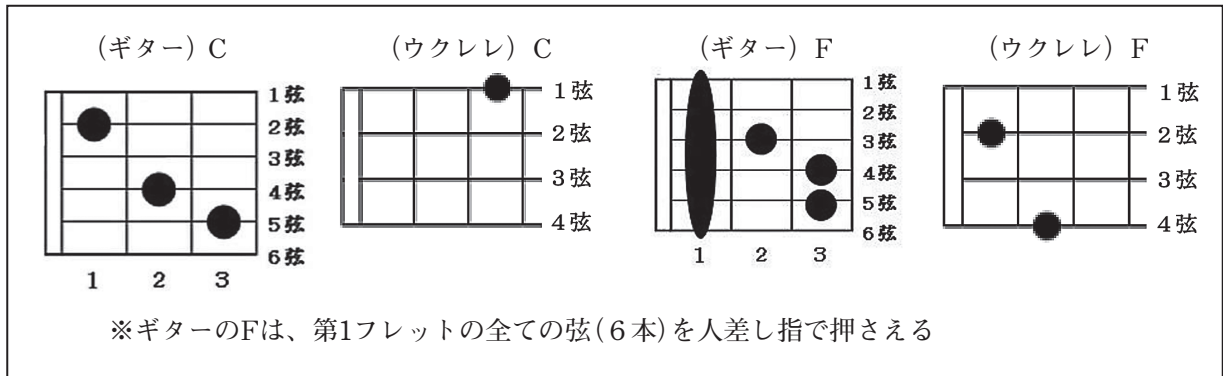
## 5. ウクレレの困難度とギターの困難度と弦の数

ウクレレの弦は4本である。一方、ギターの弦は6本である。ウクレレはギターからすると弦の数が3分の2に減っている。そのため、単純に考えても、コードで演奏する際に押さえるポジションも減る。

(図1) に示したように、コードがCの場合、ギターで押さえるポジションは3箇所であり、ウクレレでは1箇所になる。コードがFの場合は、ギターでは全ての弦を人差し指1本で押さえること(セーハ)に加えて3箇所を押さねばならないが、ウクレレでは2箇所であり大きく減る。

ポジションを押さえる数が減ることは、入門者にとって困難度が低くなると推察できる。そのため、コードを演奏する上では(少なくともCとFにおいて)、ウクレレの方がギターより易しいと考えられる。

(図1) ギターとウクレレにおける押さえるポジション数の比較(ダイアグラム)



そのほかに、ウクレレのネック(竿)はギターと比べて幅が細く、第1フレット付近で35mm程度である。そのため初心者に握りやすく、手の小さい人でも指板(フレット)を押さえやすい。また本体がギターと比べかなり軽く、演奏の際の楽器の取り回しがしやすく、入門の際の困難度は低くなると推測される。

## 6. 短時間でウクレレを習得し、困難度を下げるための方策

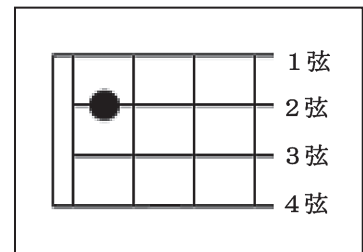
### (1) 1コード(ワン・コード)で弾ける曲を扱う

ここで注目したいのは、ウクレレにおいてコードのCは、1つの弦を押さえるだけで非常に簡単に弾くことができることである。そこで、コードがCだけで弾ける「かえるのうた」(岡本敏明作詞、ドイツ曲)を取り上げ、弾き歌いをする。教師は、弾きながら歩いたり、カエルのように飛んだりして、身体表現を交えながら手本を見せることにより、学生の興味をひくことができる。

### (2) コードFを簡略化し、CとFの2コードの曲を扱う

コードCに加え、コードFを簡単に弾くことができれば、2コードから成る曲を短時間にマスターすることができる考えた。そのため重要な方策として、今回の入門段階では、コードのFをFadd9(図2)で代用する方策をとった。それによって2コードの曲が簡単に弾ければ、入門者が達成感を得られ、また困難度が低く感じられることを狙った。

(図2) Fadd9のダイアグラム



### (3) コードFをFadd9で代用した場合の音響の違いの問題

FをFadd9で代用した場合、ポピュラー音楽理論でいう「代理コード」ほど和声感の変化は無く、ウクレレでは、元のFにごくわずかな色彩を加えたような響きになる。それを問題とする考え方もあるが、本来、編曲や伴奏づけの和声に決められた正解はない。これではいけないという和声はない

のである。幼児の歌のようなポピュラー音楽的な性格が強い曲では、聴いた感じに明らかな違和感がなければ、どのような洒落た和音を用いてもよいものであろう。さまざまなコードでアレンジされ、出版されている歌の伴奏譜があることからして、ウクレレで弾いた際に、Fが色彩を帯びたコードにアレンジされていたとしても音楽上の問題はないと考える。色彩を加えても、間違ったコードではないので、子どもたちが楽しく歌うことの弊害になることはない。ここでは、まず第一に楽器の習得の困難度を下げることと考え、まずは楽器に慣れてから、やがて余裕が出てきた段階で正式なFを習得するという将来的なスタンスを図り、Fadd9での代用を採用した。

## 7. チューニングについて

弦のチューニングは初心者にとって難しいことだが、ネックに挟んで使うウクレレ専用のクリップチューナーは簡単に操作でき、初心者でも音が合わせやすい。(しかしながら、本来の音から大幅にずれてしまって、別の音名で認識されるような場合は教師の助けが必要となる。)また、クリップチューナーは弦の音ではなく、振動を拾って音高を測定するため、大人数で一斉に音を出してチューニングすることが可能である。その点で授業の際の利便性が高い。注意したいのは、ウクレレの糸巻き(ペグ)の方式である。ヴァイオリンと同じ「直巻き式」と、ギターと同じ「ギヤ式」があるが、「直巻き式」は少し巻くだけで大きくピッチが変動するため合わせづらい。「ギヤ式」の方が微細な調整が平易にできるため、初心者には「ギヤ式」を勧めたい。

また、チューニングをすることで楽器に慣れることができるため、初めから学生にチューニングを行わせることもよいが、時間がかかるため、初めての回では、あらかじめ教師がチューニングを済ませておいてもよい。チューニングは2回目以降に実践する方が、スムーズに演奏の習得に入れる。

## 8. ウクレレ講座の実施とアンケート調査

**対 象:** 本学(保育者養成の短期大学) 1年生 総計250名

**実 施 年 度:** 2017年度、2018年度

**クラス構成:** 1クラス42～44名からなる計6クラスにおいて実施(ウクレレは1人1台使用)

**実 施 時 間:** 約65分間

**内 容:**

### ①事前アンケート

ウクレレに触れる前に、ウクレレについてのイメージについてアンケートを実施した。

### ②ウクレレの説明

ウクレレの構え方を説明し、右手の親指で弦を弾くようにした。

### ③チューニング

クリップチューナーを使用し、その使い方と、糸巻き(ペグ)を回すと音程が変わることを説明した。また各弦の音名を(G・C・E・Aの順に)歌って覚え、1弦ごと、各自がチューニングを実施し、教員がフォローした。

### ④コードCの練習と「かえるのうた」(ハ長調)

単音の奏法(ド・レ・ミ・ファ・ソ・ラ・シ・ド)については難しいので説明のみにてとどめ、またフレットを1つ移動すると半音ずつ音が変わることについて説明のみ行った。次に、ダイ

ヤグラム（指板の見取り図）を示し、コードCの押さえ方を説明した。フレットを押さえる際、他の弦に触れず、フレットを区切っている鉄の部分に触れないように注意した。また、弦を押さえる力が弱すぎると音がサステーンせず、切れてしまう。反対に押さえ方に力みがあると他の弦に触れてしまったりするので、注意深く指導した。弦を押さえる指の番号に関しては、本来ウクレレでは、人差し指＝1、中指＝2、薬指＝3、小指＝4とされているが、ピアノを学習している学生にとって、ピアノと指番号が異なることは混乱を招くので、指番号はピアノの指番号に準じた。

初心者にとって、弦を弾く右手の弾き方も難しい。ウクレレでは、どの指で弾かなければならないという決まりはない。そこで今回は、いちばんやさしいと思われる親指で弾くこととした。その際、他の4本の指はウクレレのボディを下から持ち上げるように当てがい、親指で4本の弦を上から連続して撫で下ろすように弾くようにした。また、弾く場所はサウンドホール（丸い穴）の前ではなく、ボディー（本体）とネック（竿）の継ぎ目あたりがいちばん響きのよい大きな音が出ることを説明した。

コードCの1コードで「かえるのうた」が弾き歌いできる。弦楽器が初めてである学生も、即座に1曲が弾き歌いできることでウクレレの困難度を下げ、楽器が苦手であるという学生であってもモチベーションを高められるようにした。

#### ⑤コードFの練習と「かえるのうた」（へ長調）

ここでは前述6-(2)の通り、コードFの代わりに、フレット押さえる場所が1つであるコードFadd6を代用した。コードF（Fadd6）の1コードで「かえるのうた」の弾き歌いを行い、コードCと同様にウクレレの困難度を下げ、ウクレレで簡単に弾き歌いができると感じられるようにした。

#### ⑥CとFのコードチェンジの練習

まず、コードCのポジションとコードF（正確にはFadd6）のポジションを両方いっぺんに押さえ、コード弾きするように弾く練習をした。次に、いっぺんに押さえたところから人差し指を弦から離すとコードCとなり、逆に薬指を弦から離すとコードFとなることを説明し、弦を弾かず、フレットを押さえるだけの指の練習をした。それが容易にできるようになったところで、右手で弦を弾きCとFのコードチェンジの練習をした。

左手（弦を押さえる手）の親指がまっすぐにつばるとコードチェンジがしづらいので、親指はネック（竿）の裏側を押さえることを注意した。

#### ⑦2コードの曲の練習「メリーさんのひつじ」「ふしぎなポケット」「山の音楽家」

上記の3曲を順番に練習した。コード奏法では、歌をしっかりと歌わないとメロディーがないので曲が成立しないことを伝えた。「山の音楽家」は曲の冒頭部分のコードチェンジが忙しいので、コードネームを暗誦する練習をしてから弾くようにした。

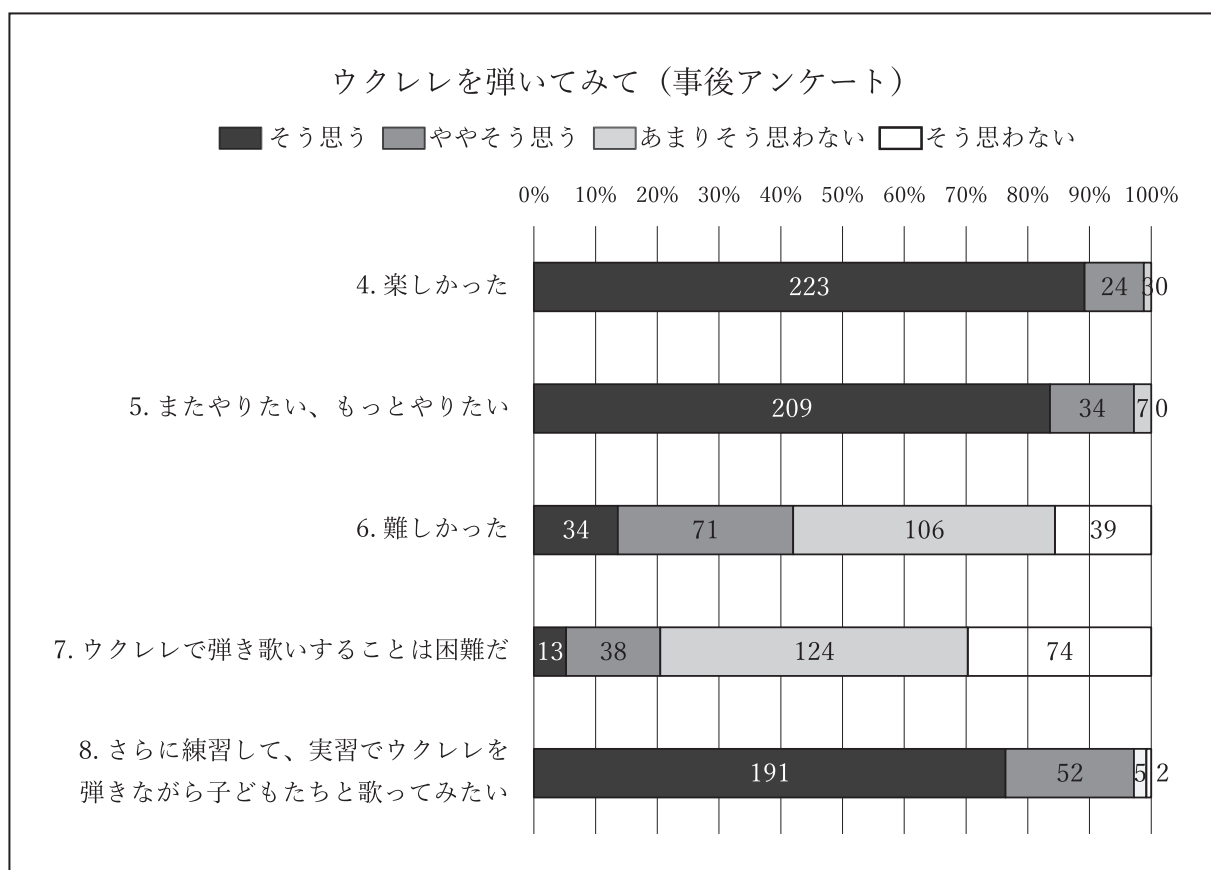
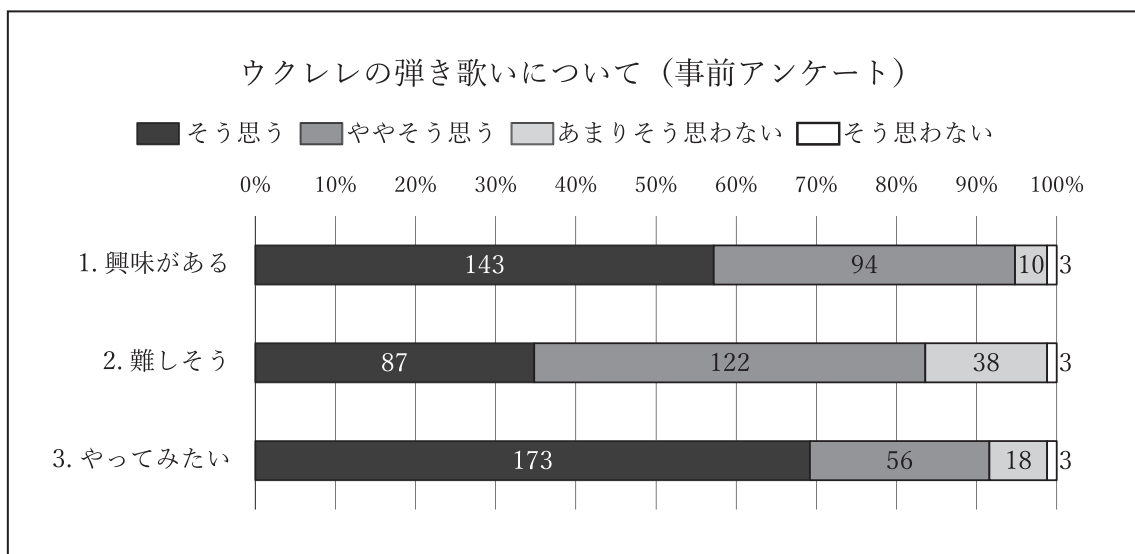
#### ⑧事後アンケート

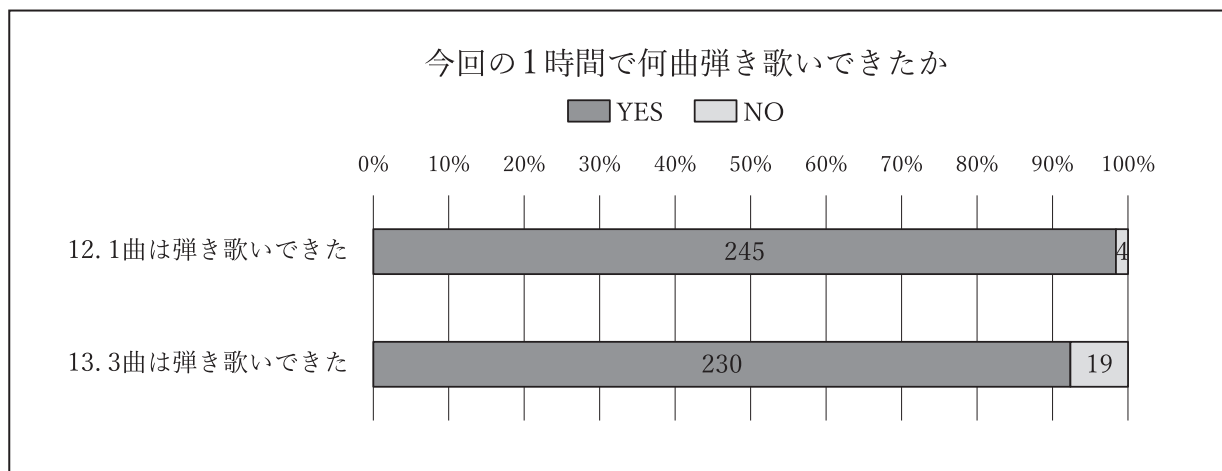
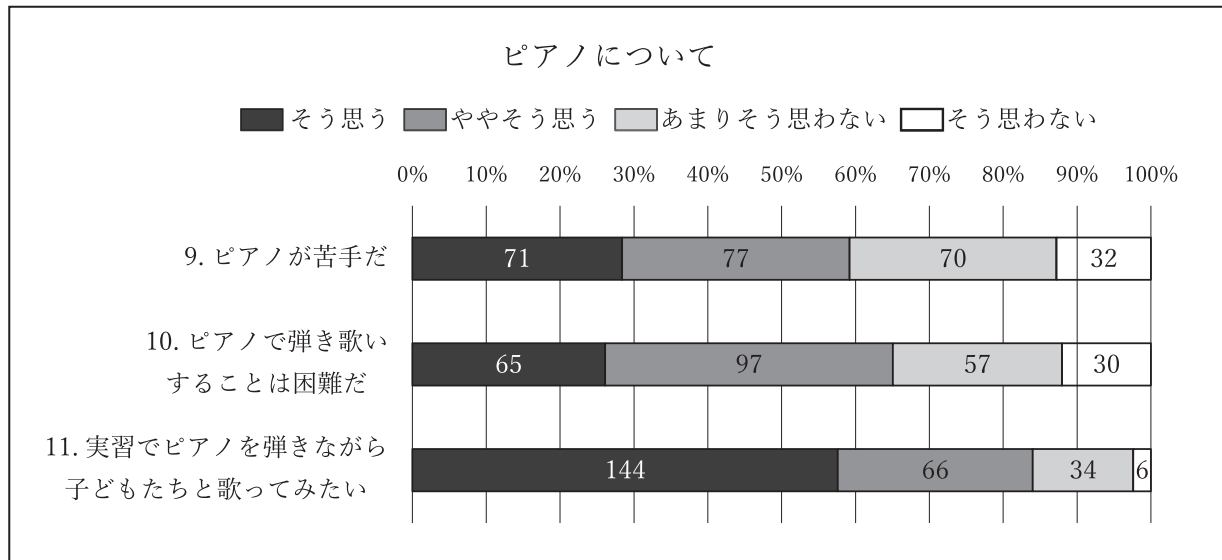
ウクレレの困難度に関わる質問を中心にアンケートを実施した。今回練習した4曲のうち何曲を弾き歌いできたか、保育の実践の中でウクレレを使って歌唱活動を行いたいというマインドについても質問した。また、通常の授業において学修しているピアノ（弾き歌い）との困難度を比較するため、ピアノに関する質問も設定した。



## 9. 結 果

(注) 質問の左の数字は質問番号、棒グラフ上の数は人数を表す。n=250





## 10. 考 察

ほぼ全ての学生がウクレレに触れたことがなく、ギターなど弦楽器の経験がない者がほとんどだが、学生たちは日頃ピアノを履修しており、子どもの歌の弾き歌いを練習している。その中でウクレレに対して「興味がある」「やってみたい」と思っている学生は90%を超えている（質問1, 2）。その理由を筆者が推測するに、ウクレレは弾くのが簡単そうだからではないかと思われた。しかしながら質問3では「難しそう」と答えた学生が83.6%と圧倒的に多かった。このことから、学生は難しそうと感じつつも、弾いてみたいという興味や意欲を持っているということがわかる。

講座実施後のアンケートからは、「楽しかった」「もっとやりたい」と感じた学生が97%を超え、ウクレレで幼児の歌の弾き歌いをすることは、保育学生にとって学修の意欲を高めるのに非常に適していると考えられる。

困難度に関して、13.6%が「難しかった」、28.4%が「やや難しかった」と感じている（質問6）。初めて楽器に触れた1時間のなかで数曲の弾き歌いに取り組んだことを鑑みたとき、この値は決して高いものではないだろう。初めて楽器に触れたのにも関わらず、58%は難しいとは思っていないことがわかった。

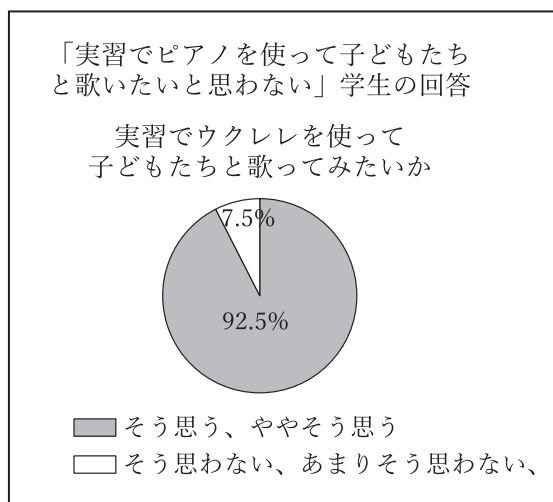
そして、ここで注目すべきは、「弾き歌いした際の困難度」である。ウクレレ自体が難しいと答えた学生より、ウクレレで弾き歌いすることが困難と答えた学生がそれを大きく下回ったことだ（質問6, 7）。ウクレレの弾き歌いにおいては79.2%の学生は困難と感じなかった。この理由には、学生は日頃の授業でピアノによる弾き歌いに取り組んでおり、ピアノによる弾き歌いと照らし合わせると、ウクレレを弾きながら、そこに更に歌を歌うという行為は難しくないということが考えられる。他にも考えられる理由があるだろうが、ウクレレを弾きながら歌うという行為が学生にとって困難に感じにくいということが明らかになった。

さらに質問8の結果を見ると、ウクレレを弾きながら実習で子どもたちと歌いたいと感じた学生は97.2%に上っている。一方、ピアノを弾きながら子ども達と歌ってみたいと答えた学生は84%であった。日頃練習しているピアノを実践の場で用いたいという意欲が高く表れているが、ウクレレはそれをさらに13%以上回っている。初めて触れた楽器であるのに、実習で弾きたいと感じられるということは、学生にとってウクレレは親しみやすく、用いる際の困難度も低いことを表している。

最終的に約1時間で何曲マスターできたかという質問には、1曲以上と答えた学生が97%、3曲以上と答えた学生は93%となり、非常に高い値となった。1曲は1コードの曲「かえるのうた」であるとしても、3曲以上と答えた場合には「ふしぎなポケット」など2コードの曲も含まれ、CとFのコードチェンジができたということを示す。

図3は「実習でピアノを弾きながら子どもたちと歌ってみたいか」という質問（質問11）に対して「そう思わない」「あまりそう思わない」と答えた学生を抽出し、その中で「ウクレレを弾きながら実習で子どもたちと歌ってみたいか」（質問8）という質問に対する回答の割合である。実習でピアノ使うことに消極的な学生は全体の16%（40人）であった。このうち、「実習でウクレレを使いたいか」という質問に対して「そう思う」「ややそう思う」という積極的な回答を示したのは92.5%（40人中37人）だった。このことから、実習でのピアノの弾き歌いに対して消極的な学生であっても、ウクレレで子どもたちと歌ってみたいという意欲を持つ割合が非常に高いことがわかった。実習でピアノ弾き歌いすることに不安を持っている学生であっても、ウクレレによる弾き歌いを取り入れることで、実習における歌唱活動に意欲をもたらし、積極的な歌唱活動を引き出す効果が十分に期待できる。

（図3）



## 11. 実施後の所感と指導上の留意点・課題

### （所感）

- ・ほぼ全ての学生がウクレレに初めて触れたが、この65分間でほぼ全員がFとCのコードを弾き分けることができた。
- ・途中で諦めてしまう学生は1人も見受けられなかった。
- ・初めてウクレレを手にしたとき、どのクラスも雰囲気非常に明るくなった。



- ・はじめに音色を聴いて感動する学生が多い。
- ・自分から率先して練習する学生が多く、次々に新しい曲に取り組む積極的な姿勢が多く見られた。
- ・練習しながら自然に歌声が出てきた。
- ・自然に身体を揺さぶりながら歌う姿が見受けられた。
- ・慣れてくると、顔を上げて笑顔で歌うことが容易にできる学生も多くいた。

#### (指導上の留意点・課題)

- ・曲の練習に入る前に、教師が1度弾いて聴かせると、その後の練習に学生の集中力が増した。
- ・チューニング前に大幅に音が狂っていると、チューナーが違う音として認識するため手間取った。
- ・左手の押さえ方より、右手のストロークの習得に時間がかかる学生が多い。親指ではじく奏法が簡単であるため採用したが、4弦全てを弾いていなかったり、強くはじきすぎて割れた音になっていることに気づかない学生も見受けられた。
- ・人差指でのダウン・アップのストロークは、手首の柔軟性、弦を弾く力加減などが掴みづらく、多くの学生は60分では獲得するに難しい。そのため採用しなかった。
- ・フレットを押さえる指の問題として、指が痛いという学生が何人かいた。強く押さえ過ぎが原因のこともあった。1万円以下の安価な楽器だと弦高が高く痛いことが多い。国産の2万円程度のものが理想である。
- ・弦を押さえている指が他の弦に触れてミュートされてしまい、そのことに気づいていない学生が多く見られた。

## 12. おわりに

楽器や音楽に対して苦手意識のある学生が、実習や勤務先で自ら進んで歌の活動を行うことができる手立てはないものかと考え、誰でも簡単に弾ける伴奏楽器を探していたことがウクレレを研究するきっかけであった。簡単にコード伴奏ができる楽器で、一般の楽器店で入手でき、高度な専門知識がなくとも教員が指導でき、また頻回なレッスンを経なくても学生が一人で上達できるような楽器は、ウクレレしかないように思う。そして今回の調査からは、ウクレレは学生が自ら積極的に歌唱活動を行うことを促進する楽器として有効であることがわかった。その他にも、ウクレレには保育における様々な利便性があり、特筆すべきはその音色の魅力だ。ウクレレの発祥の地ハワイでは、ウクレレは自然の風土と共存し、癒しの音色として人々に愛され親しまれてきた。子どもの感性を養う上で、その生の音色はどの楽器にもないような安心感と明るさがあり、おのずと笑顔をもたらししてくれる。それは現代の子どもたちにとってとても重要なものではないだろうか。今後も、保育学生が楽しんで音楽活動を展開でき、その興味に添うかたちでウクレレを用いていきたいと考えている。

**参考文献**

- 1) 山内パニオロ久之「ウクレレ入門～自宅でバーチャルプライベートレッスン～」, 島村楽器, 2009
- 2) いちむらまさき「できるゼロからはじめるウクレレ超入門」, リットーミュージック, 2016
- 3) 山下 正『『コード3つ』からはじめる！楽々ウクレレ弾き語り60』, ヤマハミュージックメディア, 2015
- 4) 古森 優「ウクレレでコードがスラスラ押さえられるようになる本」, リットーミュージック, 2014
- 5) 竹内一弘「ウクレレ入門」, クラフトーン, 2013